

# 亡き家族思い 豆紙人形作り

## 母を継いで前向きに

母は亡くなり、夫も逝った。失意のうちに作家のヒロコ・ムトー（本名・相沢絃子）さん(66)＝横浜市港北区＝は死を考えたこともある。そんな時、取り組み始めたのは、母が作り続けた「豆紙人形」だった。母と自分の作品を一緒に並べる展示会を23日から、新宿区のギャラリーで開く。

豆紙人形は和紙や綿棒、割り箸などが材料。顔は豆粒のように小さく、全体でもわずか3、5センチ。縁日などの四季折々の行事、源氏物語まで、多彩なテーマを紙人形で表現する。

友人の協力を得て母親が作った



●豆紙人形を手のひらにのせるヒロコ・ムトーさん

●ヒロコさんが作った豆紙人形。源氏物語を表現した＝横浜市港北区

## 新宿で23日から展示会

た人形の展示会を初めて開いた。

マサコさんは当時、88歳。60

代のごろから右目の視力を失っていたが2006年に亡くなるまで約300点を作り続け、ヒロコさんも毎年、展示会を開いた。「母の生き方から、人はやろうと思えばいつだって何だってできると感じた」とヒロコさん。

マサコさんの追悼展を開こうとしていた矢先、心の支えだった夫の三喜夫さんのガンが再発した。心配して追悼展をやめようすると、三喜夫さんは「おれのために時間をかけるな」と檄を飛ばした。そんな夫が09年10月、65歳で亡くなると、心に

ぽっかり穴があいた。三喜夫さんの墓前で「そろそろそっちに行ってもいい？」と語りかけた。

きっかけは三喜夫さんの一周忌での住職の言葉だった。「この日は、残された人々が小さな幸せを見つけて前へ進む日なのです」。涙が出て、何かに新し

く取り組む決心ができた。それが母親の豆紙人形を引き継ぐことだった。

マサコさんの死後、「豆紙人形を継がないの」と聞かれても、不器用だと思つて避けてきた。母親の生き方を改めて思い起こした。

ヒロコさんは昨年5月、人形を作り始め、2カ月後には今回の展示会の会場を予約した。人形はまだ七つほどしかできていなかったが、「必ず展示会を開く」という決意が揺らがないうろにした。

作り上げたのは70点。母親の力作には及ばないと思う。それでも今回、マサコさんが作った100点とあわせて展示する。

「私が一番のファンである母の人形を、まず見てほしい」

「大正・昭和の思い出 豆紙人形・母娘展」は「アートガレィカグラザカ」(03・5227・1781)で、27日まで。午前11時～午後5時(最終日は午後4時まで)。入場無料。

(後継壁之)